

一羽の鳩が舞い込んだ。「ポッポッポ」と声を掛けているうちに名前もポッポとなった。猫に片翼の付け根をかみ砕かれ、助けを求めるときのように入ってきたのだ。

獣医に診てもらおうと、この子は一生飛べない、傷は自ら治す、と素っ気ない。放置もできず面倒を見ることに。若鳥のようだが、聞くとも20年も生きる鳩がいるらしい。オヤオヤ、こちら

が先に逝くじゃないか。知人からいらなくなった猫用ケージをもらった。猫にやられた鳩が猫籠で暮らし始めるとは。終の住処となるのだから少しでも居心地良いようにと、止まり木やら何やら日々工夫改良を重ねた。餌やりに掃除、遊び相手と、新たな仕事の日課となった。

画室の窓際にある一段高

くなつた土坪余りのスペースが彼のテリトリー。あちこちの隅をくちばしでついたり、ブラインドの紐を引っ張ってタタタッと走ったり、快適そうに遊んでいる。ウンコやおシッコで絵も描く。鳩版ジャクソン・ポロック、アクシオンペインティングだ！ 飽きる

ポッポ

と、トコトコピョンとケージに戻り「入ったよ、クル

ークルクル」と訴える。広い窓や天窓からは、さまざまな鳥が行き交うのが見えるのだが、チラッと首を伸ばしたり傾げたりするくらいで、もっぱら内にいる僕を一日中見ている。頭や背中をなでてやると、灰色の臉をうっとり閉じたり

開いたりしながら「アウウウ」と奇妙な声を出し、甘がみしたりもする。他の誰にも懐かず、唯一のパートナーと思っているよう。垂れ下がった片方の羽は痛々しいが、気にしている風もない。しかし、この鳩には「飛べない哀しみ」が



うにバタバタと羽ばたく。鳥だけに与えられた飛翔するエネルギー。叶わなくも、飛ぶことの本能を失うはずもないのだ。やはり憐憫の情が湧く。でも彼はいたってのどかさうで「それはアタタの思い込み、飛べなかつたってオレはここでのんびり暮らすさ」と言っているようでもあるのだ。

と、トコトコピョンとケージに戻り「入ったよ、クルークルクル」と訴える。広い窓や天窓からは、さまざまな鳥が行き交うのが見えるのだが、チラッと首を伸ばしたり傾げたりするくらいで、もっぱら内にいる僕を一日中見ている。頭や背中をなでてやると、灰色の臉をうっとり閉じたり

僕はあたりまえに定着したペットという語感が嫌いだ。生きものを人優位の癒やしや慰めの対象とは思いたくない。彼は鳩で僕は人。いくらおもんばかろうが同列に立ててやる術など持てるはずもない。

と、トコトコピョンとケージに戻り「入ったよ、クルークルクル」と訴える。広い窓や天窓からは、さまざまな鳥が行き交うのが見えるのだが、チラッと首を伸ばしたり傾げたりするくらいで、もっぱら内にいる僕を一日中見ている。頭や背中をなでてやると、灰色の臉をうっとり閉じたり

と、トコトコピョンとケージに戻り「入ったよ、クルークルクル」と訴える。広い窓や天窓からは、さまざまな鳥が行き交うのが見えるのだが、チラッと首を伸ばしたり傾げたりするくらいで、もっぱら内にいる僕を一日中見ている。頭や背中をなでてやると、灰色の臉をうっとり閉じたり

(吉田 淳治・画家)